

青木正児とその名物学研究

辜 承 堯

Aoki Masaru and His Etymological Research

Gu Chengyao

Aoki Masaru is one of the earliest scholars who study on Chinese traditional literature in the modern time of Japan. This paper is focused on Aoki Masaru and his Etymological Studies. In his later years, Aoki mainly engaged in the Etymological study. He wrote three works—*Tyūkameibutsukō* (中華名物考), *Kakokuhūmi* (華国風味), *Pekinhūzokuzuhu* (北京風俗図譜) about Etymological research. The reason why Aoki engaged in Etymological research is in order to deepen the understanding of China classical literature. As for Aoki's the idea on Etymological research, it was more influenced by the modern Western Positivism than influenced by the textual research of the Qing Dynasty more stronger.

キーワード：青木正児、名物学、【中華名物考】、考証学

はじめに

青木正児（1887-1964）は大正・昭和期において活躍した中国文化・文学研究者として、生涯を通じて中国の文学・文物に親しみ、その風雅と趣きを愛し、中国の古典文学とともに、通俗文学も学術的に評価し、とりわけ狩野直喜（1868-1947）、内藤湖南（1866-1934）が切り開いた京都支那学の研究団体——京都学派の発展に大きく寄与した学者の一人である。

青木の卓抜な着眼によって始まった中国学の研究領域は少なくなかったと言える。四男中村喬（中国文化史学者、立命館大学名誉教授、中村家に養子に入る）は青木の学問を主に三つの方面にまとめ、「一は關於俗文学方面的、二は關於絵画芸術方面的、三は關於風俗、名物学方面的。」¹⁾と指摘されていたように、氏の生涯を通じて、「近世戯曲」、「文学評論史」、「中国文学思想」、「書画論」、「名物学」、「酒茶論」などの重厚な業績が挙げられる。

日本における名物学の先行研究は管見の限り極めて少ない。湯城吉信氏の「中井履軒の名物学:その

1) 青木正児著、范建明訳【中華名物考】（中華書局、2005年）（范建明氏によって訳された【中華名物考】が出版の際に、中村喬は【序言】を寄せた）、2頁。

『左久羅帖』『画舫』を読む』においては、『左久羅帖』という画冊および、その解説書『画舫』に取り上げられた動植物を解明しながら、漢学者としての中井の思想傾向——自らの考える法則性に従い、宗教的神秘主義を排し、合理的に名実一致を求めた。したがって、日本と中国とに共通性を見出したうえで、日本のほうが優れているという立場を取っている²⁾。

加納喜光氏の『毛詩草木鳥獸虫魚疏』——詩経名物学の祖』においては、日本の江戸時代に、『詩経』の植物考証の著作、『詩経名物弁解』（江村如圭、1731年）、『詩経名物集成』（茅原定、1758年）、『陸氏草木鳥獸虫魚疏図解』（淵在寛、1779年）、『毛詩品物図考』（岡元鳳、1785年）を挙げて、『詩経』中に詠まれている植物をいくつか解明した³⁾。

久保輝幸氏の「牡丹・芍薬の名物学的研究：牡丹とヤブコウジ属植物の比較」において、作者は『牡丹譜』、『本草集注』、『出雲国風土記』、『本草和名』など夥しい史料を調べた。中国を代表する花——牡丹に対する中国人の捉え方は、唐代のある時期を境にして大きく変わり、「今の牡丹」が「昔の牡丹」ではなかったということを見出した⁴⁾。

著作では棚橋淳二氏の『名物学』が挙げられ、これは同氏昭和56年度から60年度にかけて、大学での講義ノートに基づき刊行された基礎的な研究である。全書は名物確当史、名物隔離の要因、名物確当の契機、名物確当の方法、名物確当の限界など幾つかの部分に分けて名物学という学問の概観を紹介している⁵⁾。

以上の先行研究を踏まえながら、本論文では主に三つの方面から青木正児の名物学研究を検討しようと考えている。第一に、名物学の研究内容と意義について説明する。「名」と「物」との対応関係は時代や地域などによって異なるので、古典に記録されていた動植物は現在の名前が何であるかという作業が重要であり、とくに現代社会において生薬の研究にかなり役に立つ。第二に、青木の名物学研究の成立過程について、萌芽期、摸索期、成長期を三つの段階に分けて説明する。青木の生涯を振り返ると、名物学の研究へ視線を向けていった原因を自分の興味、後輩からの質問、戦時中の食糧問題などにまとめていることが分かった。第三に、青木の名物学研究のスタイルに関する考察すると思う。青木の著作『中華名物考』によると、訓詁学としての名物学、名物学の独立、名物学の展開、考証学としての名物学を四つの部分に分けられる。これらの論述を通じて、名物学における青木の研究方法と論理構築を解明する。

一、名物学とは何か

前に触れたように、青木の後半生を特徴付ける学問の一つに名物学が挙げられる。ところで、「名物学」という概念は近頃の学界においてあまり聞き慣れない名称であろう。この「名物学」という学問は

2) 湯城吉信「中井履軒の名物学:その『左久羅帖』『画舫』を読む」(『懐徳』第八十二号、2014年)、51-53頁。

3) 加納喜光「『毛詩草木鳥獸虫魚疏』-詩経名物学の祖」(月刊しにか、第七卷第十二号、1996年)、18-23頁。

4) 久保輝幸「牡丹・芍薬の名物学的研究：牡丹とヤブコウジ属植物の比較」(薬史学雑誌、第四十六号、2011年)、89-90頁。

5) 棚橋淳二『名物学』(楽志舎、2006年)、i-vii頁。

如何なるものであるか。名物学は字面から理解したら、特産品についての学問だと思われてしまうこともあるかもしれないが、実は、「名」と「物」を一緒にして、「名物」と理解するのではいけなく、「名」と「物」を分けて理解すべきである。名物学は「名」と「物」の対応関係を調べる学問である。名物学について、植物病理学・本草学学者白井光太郎博士（1863-1932）はこのように定義を下していた。

名物ト云フノハ、物ノ名と実物トヲ対照シテ調ベル。歴史トカイロイロノ書物ニ出テ居ル所ノ禽獸草木其外物品ノ名実ヲ弁明スル。此ノ学問ガ矢張必要デアリマス。書物ナドニイロイロノ品物ガ書イテアツテモ、実物ガ何ウ云フモノデアルト云フコトガ分ラナクツテハ真ニ書物ガ分ツタノデハナイ⁶⁾。

簡単に言うと、名物学はある時代のある場所で使われている名前は現在の何を指しているのかということ明らかにする学問である。青木の著作『中華名物考』の序章「名物学序説」においても以上の定義を引用したうえで、さらに、青木は名物学を「名物学は何より出たかと云ふと、訓詁学の一部として、一体不可分の密接な関係を保ちつつ発生してきたものと考えられる。（中略）要するに斯学は端を名物の訓詁に発し、名物の考証をもって窮極の目的とする⁷⁾」と加えて説明している。名物学は伝統的には訓詁学と呼ばれる学問の一分野で、主に儒教古典に出てくる動植物名が一体何であるのかを研究するものである。二人の定義から見ると、本草学と訓詁学における名物学の研究は、若干色合いが異なっている学問であった。

日本においては、古くは奈良時代以前から平安時代にかけて隋・唐・宋などの文化を取り入れ、次いで安土・桃山時代、江戸時代にかけてポルトガル、オランダなどの文化が流入し、そして幕末から明治時代に欧米諸国の文化を吸収した時に、それぞれ幾多の困難を克服し、物と物の名を対照して直接確かめる作業、すなわち名物確当を行いつつあった⁸⁾。

文化伝播の過程において、言語、情報、風土、認識の程度などの要素で、取り入れる側は往々にして流入されている文化を全面的かつ正確的に理解しかねる場合が多い。例えば、儒教古典の一つ『詩経』にはいろいろな植物名が出てくる、その中に「芄蘭」「香蘭」など「蘭」という草がよく見られるが、この「蘭」は今の「ラン」ではなく、日本で「フジバカマ」と呼ばれている植物のことである。また日本料理のレシピに出てくる「ニンジン」を、中国語でそのまま文字通りに訳せば、「日本人が料理に朝鮮人参を使うのか」と誤解されてしまうかもしれないが、実は、中国語において「人参」は日本語の「朝鮮

6) 白井光太郎「博物学者としての貝原益軒」（序文）（『考注大和本草』白井光太郎考注、第一冊、東洋医薬叢刊、春陽堂、昭和7年）、5頁。

7) 青木正児『中華名物考』（春秋社、1959年）、5-6頁。

8) 平安時代以来、名物確当の作業を進めるために、多くの辞書が編纂された、例えば『倭名類聚鈔』（源順撰、931-938年間に成立）、『色葉字類抄』（橘忠兼撰、1144-1181年間に成立）、『訓蒙図彙』（中村惕斎編、1666年、22巻）、『名物六帖』（伊藤東涯、1714年）『羅葡日対訳辞典』（イエズス会編、1595年）などが挙げられる。また、医学書・本草書の方面においては『本草和名』（深根輔仁撰、901-923年間に成立）、『大和本草』（貝原益軒著、1708年）、『本草綱目啓蒙』（小野蘭山著、1803年、48巻）などがある。

人参」に相当する。以上の二つ例から見ると、「名」と「物」との対応関係は時代や地域などによって異なり、いわゆる名物隔離⁹⁾が存在するわけである。

前に触れた青木の著作『中華名物考』によると、名物学の歴史は古く、中国においては『爾雅』に始まるということが分かった。もともと経書を正しく解説するための手引きとして書かれた『爾雅』は、およそ450もの動植物名を挙げて解説し、まさに博物学的な色合いの濃い辞書である。物とその名を弁ずる名物学の始まりであるとともに、博物学の萌芽といってよいものであろう。日本の場合において、名物学は薬物の学としての本草学から再分化してきた領域である。水谷真成（1917-1995、中国音韻史学者）氏の「青木正兎先生の名物学」という解説文において、このような説明している。

わが国近世以前の本草学は、(一) その本来の任務たる薬物の性能についての学としての他に、(二) およそ天然に産する物の名称・異名・産出状況・形状・利用等から、(三) 農業・園芸・水産からその栽培・養殖の方法・利用等の産業面までも含む広義の学であった。近世江戸時代に入り、実学勃興の風潮に沿う技術学・経験科学の興隆と各地における殖産の振興は、従来の本草学に包摂されていた諸分野の充足拡大からそれぞれが次第に分科することになり、前記(一)を従前よりの名称「本草学」とし、(二)を「名物学」とし人工のものまでも含め、(三)を「物産学」を呼ぶ次第となった¹⁰⁾。

日本の本草学は近代実学の興隆にともない、名物学、物産学と本草学三つの細かい学問に分かれていった。また、江戸後期の曾占春（1758-1834）はその著作『農経講義』の付録において、文化三年（1806）春二月付の「本草、名物、物産、各異也」という一文に「概してこれを言え、則ち本草は方伎の材なり、名物は詩書の用なり、物産は農事の本なり」とし、名物学を「薬物の他、詩書典籍載する所の万物および動物の名、多くこれを識り、博くこれを弁ず、これをこれ名物の学というなり。必ずしもこれを本草とは謂わず。必ずしもこれを物産とは謂わず」と規定していた¹¹⁾。要するに、日本で一般に言われてきた名物学は、本草学の一部門として発展してきたわけである。日本の名物学は本草学を母胎として生まれ育ったものとも言えよう。

一、青木の名物学研究の成立

前に触れたように、青木の飲食考証は、晩年に力を注いだ「名物学」の一つの成果と言える。この研究について、青木の後輩吉川幸次郎は次のように青木の名物学の研究業績を評価している。

9) 名物隔離とは異なる地域（集団）、時代において物に付けられた名を、名が付けられたもとの物に対応させることができない状態をいう。すなわち名とそれに対応する物との関係が失われた状態をいう。

10) 水谷真成「青木正兎先生の名物学」（袁枚著、青木正兎訳『随園食単』、岩波書店、1980年）289頁。

11) 上野益三『日本博物学史』（平凡社、1986年）、67頁。

晩年の博士は、余事として、中国の食品および器物の歴史に興味を持ち、『中華名物考』（昭和34年）を代表とし、『華国風味』（昭和24年）、『琴棋書画』（昭和33年）、『抱樽酒話』（昭和23年）、『中華飲酒詩選』（昭和36年）『中華茶書』（昭和37年）その他の著書があった。必ずしも好事の業でなく、いかなる名の食品なり器物なりは、いかなる実体と歴史を持つか、つまり「名」と「物」との関係、実証的に究明するものであって、『中華名物考』の自序に、「前人未発の試み」という¹²⁾。

また、青木の名物学については、その著作『中華名物考』の自序に詳細な説明があるほかに、『青木正児全集』第八巻には、水谷真成氏の解説文「青木正児先生の名物学」と、『華国風味』（岩波文庫）には、戸川芳郎氏の解説がある。よって、ここではこれらの資料を参考にしながら、青木名物学の成立過程の経緯を紹介すると考える。分かりやすく青木の名物学を紹介するために、その成立過程を三つの段階に分けてみよう。

第一段階は萌芽期である。これは青木の京都帝国大学在学中（1908-1911）および東北帝国大学在職中（1924-1938）の時期であり、いわゆる「風俗研究」の時期でもある。『中華名物考』自序によると、青木は京大在学中、「専攻の支那文学の理會を助ける為に、中華の風俗を知る必要を感じて、折々研究室で上海出版の『点石齋画報』を楽しみつつ閲覧し」たり、また休暇帰郷中には、『清俗紀聞』（13巻本、寛政年間出版、長崎奉行中川忠英編）を一冊欠けていたにもかかわらず、「飛び付いて買って来た」。さらに江戸時代の山東京伝（1761-1816）の『骨董集』、柳亭種彦（1783-1842）の『還魂紙料』、喜多村信節（1783-1856）の『瓦礫雑考』、『筠庭雑考』などの書に、「古図を徴引して昔の風俗器物を考証してゐるのに心を惹かれて、中華の風俗を研究するにも、一法として当に此れを学ぶべきであると痛感し」たという¹³⁾。

また、当時東北帝国大学の助教授として勤めていた青木は、大正14年（1925）、北京遊学の際に画工を物色し、『北京風俗図譜』を制作させたのである。前掲の中川忠英編『清俗紀聞』の南方（浙江、福建）の風俗に対し、北方の内容を補完するという意図もあった。『北京風俗図譜』のほかに、青木はまた『新春画冊』、『祭礼紙様』などの風俗関係の資料も集めている。これらのものは「風俗研究」でもあるが、「名物研究」の要素がすでに含まれているともいえる。

昭和16年（1941）に出版された『江南春』には、大正15年（1926）から昭和13年（1938）にかけての随筆をまとめた「竹頭木屑」が収録されるが、その中の「幌子」、「鼻煙」なども名と物の研究に関わっている。

第二段階は模索期である。青木が京大に転任して三年目の昭和16年（1941）に、中華文化の普及を目的とする『麗沢叢書』を出版する際に、学生諸君から名と物に関する質問を受けたのがそもそものきっかけであった。たとえば、「籐墩」や「桐油脚」は一体何の物であるかなどに関する問題に対し、青木も学生と一緒に調査していくうちに、「名物学」を重視し始めるようになるのである。

「桐油脚」は、すぐには解決がつかなかったが、のちに昭和19年に論文「名義瑣談」を発表していた。

12) 吉川幸次郎「青木正児博士業績大要」（『吉川幸次郎全集』第17巻所収、筑摩書房、1969年）339頁。

13) 青木正児『中華名物考』（春秋社、1959年）1、2頁。

さらに、昭和19年から22年にかけての論文を一冊にまとめて出版したのが、『華国風味』（弘文堂、昭和24年）である。青木自身は「これが私の名物学建設の第一歩であつた」と位置付けている。

第三段階は成長期である。青木の名物学の理論建設とそれに伴う実証研究の時期である。昭和21年4月から12月にかけて、京都帝国大学で「名物学緒論」と題として講義を行い、のちにこれを訂正、補足して九州大学で「名物学通論」と題として講義した。以後、山口大学、立命館大学でも同様の講義を行っていた。そして昭和33年秋、青木はそれまでの講義を節録という形で、「名物学序説」と題して『中華名物考』（春秋社、昭和34年刊行）の巻頭に置いた。『中華名物考』の「自序」において、その本場の名物学著作の成立の経緯について、次のように説明している。

私は還暦停年で京都大学を退く前年、最後の講義になにか変わったものを置土産にと思つて、試みたのが「名物学緒論」で、（昭和）二十一年（1946）の四月から十二月まで続けた。何しろ前人未発の試みなので、組織に相当苦勞をしたが、楽しくもあつた。其後（昭和）二十八年に九州大学から短期の出張講義を頼まれたので、是を機会に旧稿の蕪穢を治め、「名物学通論」を題して之を講じた。其後一たび山口大学で講じ、今又立命館大学で講じつゝある。其の都度多少の修正は加へたが、未だ是を一冊の書として世に問ふだけの自信は持てない¹⁴⁾。

青木は後に振り返っているように大学での度重なる講義から、そして前述の『中華名物考』をはじめ、名物学関係の本を何冊も著したことからも窺える。この「名物学序説」が青木の名物学の理論を述べたものとなる。これについて青木は「私の謂ゆる中華名物学の体系を公にすることとした次第である」と、その自信を示した。

ちなみに、昭和30年代に、青木の訳注・解説の作品は『琴棋書画』（春秋社、1958年）、『随園食単』（六月社、1958年）、『中華飲酒詩選』（筑摩書房、1960年）、『酒中趣』（筑摩書房、1962年）、『中華茶書』（春秋社、1962年）が相次いで刊行され、青木名物学の豊かな世界が築き上げられることとなる。

学生から名物に関する質問を受けた青木は名物学の研究へ視線を向けていった。一方で、戦中戦後のままならない食糧事情が青木の名物学研究を加速させた面も見逃せない。「近年の食生活の窮屈なところから、この方の神経がただ尖りに尖って、本を読んでもとかく食い物の事が目に付きやすく、書くことも食い物の話が筆が走りたがる、文学も糸瓜もあったものでない。」¹⁵⁾と本人がそのまま告白した。また、次世代の学徒として青木に常に強い関心を寄せていた竹内好（1910-1977）は同じようなことを述べた。

青木さんは戦争中から戦後にかけて、食品に関する随筆をいくつも書いた。食生活の不自由さが、これを書かせたと青木さん自身は冗談めかして語っている。それを集めて『華国風味』という本が昭和二十四年弘文堂から出版され、青木さんの還暦記念文集『中華六十家言行録』の執筆者一同に

14) 青木正児『中華名物考』（春秋社、1968年）4、5頁。

15) 青木正児『華国風味』（岩波書店、1984年）自序より、4頁。

配られた。私も一冊を頂戴した¹⁶⁾。

また、「愛餅の説」、「匙で飯を食べた支那の古風俗」（後に「用匙喫飯考」と改題）、「饅頭の歴史」、「焼筍」など当時、書いた名物学に関する考察のタイトルを見れば、そのことは一目瞭然であろう。青木は独自の名物学を進める中、中国の古典への蘊蓄を傾け、そして食への好奇心を総動員して翻訳に取り組んだ。

二、青木の名物学研究のスタイル

巨視的、系統的な文学史の研究と明らかに違い、名物学の研究は微視的、具体的な学問に属するのは言うまでもない。名物学の研究は典籍・文献における植物、動物、器物、法令制度、風俗にわたる物事に対する本源まで遡ることに重きを置く。青木は地道な研究方法を通じて、飲食、民俗、酒茶などの方面から幅広いかつ緻密な考証を展開した。

前によく触れたように、青木は『中華名物考』の「名物学序説」において、中国における諸学の中での名物学の位置づけを試みている。「名物」の語は古く『周礼』に「名号と物色と」、つまり物の名称とその形状の特色の意味で用いられるが、青木はそのような名物の追究は中国古来の訓詁学の一部として発生し、展開してきたとして、「名物の訓詁、すなわち名物学が其の重要な地位を占めているし、また其れから分離独立して一科を成しているものさえあるので」、さらに一部門を立てて「中華名物学」とし、以下の四章に分けて説明している。

（一）訓詁学としての名物学。

訓詁とは古い字句の読みや意味を解釈することで、考証とは文献などを調べ、昔の事象や事柄などを実証的に説明することである。訓詁学は小学（中国古典の言語文字学）が扱う体制（字形）・訓詁（字義）・音韻（字音）のうちの一科として、字義を考究する部門であり、『爾雅』十九篇を鼻祖とする。『爾雅』は前三篇が言語部分の訓詁であるほか、十六篇が器物・天地・山水から草木・鳥獸に至る「名物」に関する訓詁で占められる。

（二）名物学の独立。

後漢末期の劉熙の著作『釈名』においては天地から疾病・喪服までの二十七部門、うち一部の篇が言語を扱うのを除いて、すべて「名物」の訓詁であって、物類の「物名に即して、義（物の意味）を釈く」事典である。ここに名物学の独立の端緒が開けた。この書の後継は絶えたが、一方、『詩経』の名物学研究が、詩教（経学の一つ）のうち「多識の学」として、動植物の古今の名称やその形状・食味・薬性などを説明する書となって出現した。呉の陸璣の『毛詩草木鳥獸虫魚疏』がそれで、『釈名』がなお訓詁

16) 竹内好「『餅』と『餌』」（『中国を知るために』第二集所収、1970年、勁草書房）6頁。

の形式を取るのに比し、陸書はもっぱら「物質」の研究であって純然たる名物学が発足した。それには「図」録をも伴っている。

(三) 名物学の展開。

礼学と格古や本草・種樹・物産および類書が名物学の全体を構成する。礼学は礼法に用いる服飾・器用・飲食・宮室の名称の解説が必要である。つまり「名物・度数（制度）」の解釈に伴い、各種の『三礼図』が生まれた。格古とは、古器物を鑑賞弁別することで、宋代からの考古学的な古器珍玩に始まり、金石の記録や図録が多数出現する。本草とは、薬物学として動植物のいちいちの性状を識別研究する。種樹は、園芸学であって作物の性状を研究する。物産は諸国の風土を特色ある物産を記録する。類書は、万般の物品事象に関する古来の文献を類別編集した百科事典である。これらは、六朝に始まり、唐から明にかけて大に行われた。

(四) 考証学としての名物学。

清代考証学の興隆にともない、専門分野の名物を「類聚」して考証する名物学が出現した。礼学の名物度数に関する古記録を分類整理した、江永（1681-1762）の『郷党図考』、戴震（1724-1777）の『考工記図』に代表される書物には、譜表や図録を添えて精緻な論証が加えられている。それには衣服・飲食・住居・工芸などの各方面の名物考証を含む。

また、名古屋大学附属図書館に所蔵される「青木文庫」において、彼の手書きノート12冊が残っている。同大学の教授張小鋼氏の調査によると、そのうち10冊が名物学と深く関わっている¹⁷⁾。これらのノートには食べ物の中心に、酒、茶から園芸植物、身の回りの品々に至るまで多種多様な物、項目が登場し、その内容は微に入り細を穿つ。10冊ノートは、自らの考察を深めていく上で、なくてはならない存在であったのであろう。これから、「借読鈔存」(五)と表題が書かれた10冊ノートの1冊に記述していることを例として挙げる。明朝の滅亡とともに亡命し、水戸藩主の徳川光圀（1628-1700）に仕えた儒者朱舜水（1600-1682）の言葉を記録した「舜水朱氏談綺」の抄録に続き、次のようなコメントを書き添えている。

此巻名物を明らむるに益少なからず、余嘗て「橙」をユズなるべきを考へ、おりおりその考証資料の蒐輯を心がけしが未だ確証を得ざりしに、此巻には明らかに之を訓ぜり、甚だ我意を得たり。

昭和廿一年七月二十五日朝 正児識す

『橙』という漢字の和訓は『ダイダイ』だが、中国では『ユズ』を意味するというのが訓詁学、考証学、そして豊富な読書経験から導き出された青木の結論であった。その証拠となる文献に出合った喜びを記している。この発見は1947年9月に書いた「柚の香頭」に生かされている。朱舜水の言説を門人安積澹泊が備忘のために記録したものであるが、その巻下の語彙集の中において、

17) 名古屋大学附属図書館2007年秋季特別展「『遊心』の祝福——中国文学者・青木正児の世界」、56頁。

橙子。ユズ。日本ニテ柚ト言ハ誤ナリ。唐山ノ柚、上ニクビレメアリテ肉ナシ。下ニ肉アリテ徑六七寸アリ。（中略）と説いて、彼の土の『橙』は我が国のユズであり、『柚』は別の品であることを指摘してゐる。『橙』がユズであることは、中華果樹研究の権威菊池秋雄博士なども近年実地に之を確かめておられるが、是を説破したのは恐らく朱舜水が始めてあらう¹⁸⁾。

と説明している。また、青木は中国戯曲の中に出た植物にも大量な考証を行った。文献・作品解釈上における意義を説明している。「鶏頭」というものをめぐって考証した。青木正児氏によると、正徳年間にはすでに鶏頭をケイトウに当てているが、これは誤りであるという。鶏頭が芡（鬼蓮・水蓼）の実り¹⁹⁾の名であることが分かっていないと、元の雜劇「望江亭」第三折の対句「鶏頭箇箇難舒頭 龍眼团团不転睛」を「鶏頭の子は一つ一つ累なつてゐても、鶏の頭とは名のみで、実際に頭を舒べることは難しい。龍眼の実はまん^ま团团^まころころしてゐても、龍の眼とは名のみで、実際に目玉を転ばすことは出来ない」というように解釈することはできない²⁰⁾。

また、日本人にとって馴染みの唐代詩人張継（約715-約779）の詩「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠。」（月落ち烏啼き霜天に満つ、江楓漁火愁眠に對す。）の楓は多少の疑義は残るにしても、カエデ科のカエデではなく、マンサク科のフウ（楓香樹）であるという。それは蘇州から太湖にかけて、かつてフウの大純林があったことなどの理由による²¹⁾。フウは中国に自生する落葉高木で、高さ20メートル、径1～2メートルに達するものもあるという²²⁾。夜空を劃す亭々とそびえるフウの樹影はカエデのそれとは全く異なるものであらう。

他には、唐代詩人蓋嘉運（生卒年不詳）の「伊州歌」において「打起黃鶯兒、莫教枝上啼。啼時驚妾夢、不得到遼西。」、韋應物（737-792）の「聽鶯曲」においても「東方欲曙花冥冥、啼鶯相喚亦可聽。」などよく詩に用いられる「鶯」は日本のウグイスと異なっていることを考察した。

中国での意味と和訓との食い違いは、講義「名物学緒論」でテーマの一つになっている。青木の著作『中華名物考』を繙くと、「鮎」、「鱸」、「鮭」、「鴛鴦」などの研究も窺える。「日本の物より類推すると間違ふことがある。名は同じでも形状、品質、性質が異なることがある。」と注意を喚起している。中国の文学を理解するためにはまずもって物の名の意味を正確に把握する必要があると青木が指摘されるように、「物の名の意味の正確な把握」は、中国における原意と和訓との比較だけにとどまらない。その取り組みは百科全書づくりにも匹敵する膨大な作業であった。名物学は青木にしかできない学問であったのかもしれない。

18) 青木正児「柚の香頭」（『青木正児全集』第八卷所収、春秋社、昭和46年）60頁。

19) 青木正児『中華名物考』（春秋社、1968年）、第264頁。芡の実は拳ほどの大きさで、石榴の如く内に累々として珠の如き子を包んでいるという。

20) 青木正児、『中華名物考』、263-265頁。

21) 満久崇磨『同名異木のはなし』（思文閣出版、1987年）、26-28頁。

22) 牧野富太郎『牧野新日本植物図鑑』前川文夫〔他〕編、（北隆館、1966年）、247頁。

終わりに

青木の名物学研究の特徴をまとめれば、江戸時代の伝統的な漢学研究と少々色合いを異し、研究方法は名物の訓詁に考証を加え、すなわち考証学の方法である。これは清代の中期乾隆以後にだんだんと隆盛になりつつあった訓詁学につながっている。その研究理念は近代ヨーロッパに唱えている実証主義に一致するというより、むしろ清代から日本に伝わった考証学の影響のほうが強いのではないだろうか。名物学と実証主義とも、研究者と研究対象との間のもっとも真実に近づく繋がりを求めている。実は中国文学研究においても、名物学研究においても、青木はこの二つ研究に同様視している。文学も料理する塩加減のように、小さな誤差でも微妙な風味が生じる。

文学は須らく味はふ可きである、陶醉すべきである。然し食へども其の味ひを知らず、酔へば即ち足ると云ふやうな牛飲馬食の徒であつてはならぬ。一寸した塩加減、微妙な風味にも靈感する味覚を養はねばならぬ。味覚とは何ぞ、鑑賞力である。鑑賞力は何によつて養はれるか、経験徒批判とに因るであらう。経験は読書によつて増進し、批判は熟慮によつて正当を得る。つまり読んで考へると云ふ平凡な結論に達する²³⁾。

ところが、青木が従事した名物学研究は時代遅れになるかという問題に対して、前が触れた竹内好は1970年に雑誌『中国』に掲載された「『餅』と『餌』」において、青木の名物学研究方法を批判した。

青木さんのことは、(中略) なにしろ大学者でかつ文章家である。ここに挙げた随筆類も、おどろくべき博引旁証であつて、しかも退屈を漢字させない。まずは見渡したところ、青木さんの遺録を継ぐ人は今後現れそうにない。もっとも、博引旁証とは言つても、そのかなりの部分は書類に頼っているらしいのを、今度発見した。ただし青木さんのことだから、類書からの引用であつても、きっと原典に当たる手間を省いてはいないだろう²⁴⁾。

とまで言い切っている。その一方で、「いかにも青木正児さんは博識だった。しかし青木さんの知識はほとんど文献の知識に限られている。その点で青木さんの学問はもう古い」とも漏らしている。敗戦を契機に日本の学問状況は大きく変わりつつあった。しかし、グローバル化の世界において、異文化の交流と理解は現代人にとって直面にしなければならぬ問題になり、その中で最初にぶつかった障碍は他国の名と物との異なりである。この問題に関して、青木は「名義瑣談」において先見性を示した。

夫れ物類は限り無く、品目繁多にして識り難きものも多く、凡そ異国の書を読むに方つて、是くらゐ厄介なものは有るまい。而も物そのものを好く知つてゐないと、折角の叙述が了解出来かねる

23) 青木正児『支那文学概説』(弘文堂、1935年)序より、1頁。

24) 竹内好「『餅』と『餌』」(『中国を知るために』第二集所収、1970年、勁草書房)7、8頁。

し、假令略ぼ理会せられても、どうもピンと来ぬ。是れ吾々が支那の書を読むに方つて常に悩まされてゐる一事であつて、字典ぐらゐを引いて見ても適切な訓詁が出て来ぬ物が多いし、たとひ有つても文字上の説明では腑に落ちかねるものが少ない²⁵⁾。

さて、青木がなぜこんなに名物考証に熱意をこもってに研究していたか原因を探求すると、前章でも触れたように、青木は中国の古典文化の生活状況をできるだけ復元することを通じて、中国古典世界への理解を深め、中国文化への憧れも見逃さない姿勢を求め続けたのであろう。明治以降の西洋化の風潮で、同じ支那学者の吉川幸次郎は中国への憧憬を告白した。「しかしいずれにしても、中国風な思索が、人類の故郷の一つであり、そこへの郷愁を、意識的無意識的に、いざのうものであることを、物語るものではあると考える。」²⁶⁾

以上に述べたように、青木が実証的な方法で名物研究を地道に行い、長い研生活の結果、多方面にわたる経験と知識の蓄積が渾然一体となってはじめて生み得た稀有な業績である。青木は『中華名物考』自序の最後に「貧弱ながら本業外の道楽仕事としては、聊か会心の笑みの浮かぶを禁じ得ない。私も今は隠居の気楽な身の上、もう是からは是を本業にしようかとも思ふ。」と述べた²⁷⁾ 青木がこの名物研究を通じて、中国への親近感を一層強めたことが分かる。

25) 青木正児「名義瑣談」、前掲書、45頁。

26) 吉川幸次郎「中国文化への郷愁」（『吉川幸次郎全集』第二巻所収、筑摩書房、1969年）368頁。

27) 前掲青木正児『中華名物考』自序、5頁。